

アフリカ現代史I

第9回

植民地解放闘争(1)

本講義のねらい

- 植民地抵抗運動（特に第1期、第2期）の多様な実態を理解する
- 第1期、第2期の歴史的再評価

1 ヨーロッパ植民地支配に対するアフリカ人の抵抗と解放運動

解放闘争の歴史区分 ジャック・ウオディス

区分に関しては他の説もあり(『新書アフリカ史、397～398ページ参照)

＊ 第1期 1880～1910 初期抵抗期

＊ 第2期 1910～1945 独自の抵抗形態形成

- 植民地支配の体制 確立
- 伝統的様式と近代組織原理が入りまじり抵抗

＊ 第3期 1945～1960 植民地ナショナリズム

2 アフリカ社会による植民地支配に対する多様な対応

①対決路線型

- ズールー(リンポポ川以南)、ンデベレ(リンポポ川・ザンベジ川の間)、ベンバ(ザンビア)など
- 豊かで強力な国家をいただく社会

②イギリスの保護領・監督領になることを要求

- ボーア人やズールー人の圧力に対抗するため

③同盟路線

- 小規模な首長国や統一した政治権力をもたない諸社会
- 南アのコイサン、コーサ、北ローデシア(現ザンビア)のルング、ニヤサランド(現マラウィ)のチュワ、トンガ ⇒ イギリスと個別に同盟、キリスト教へ改宗

3 1920代以降のアフリカ人の抵抗

2つの抵抗のパターン

①近代的で組織的な抵抗

- 原動力：労働組合、農民組合、政党、民族結社、秘密結社、青年団体

②伝統的又は非ヨーロッパ的抵抗形態

- 伝統的儀礼、呪術、アフリカ化したキリスト教、王権などを触媒 社会・宗教運動の形態をとる
- 外見は復古的、組織や武器は近代化
- ケニアのマウマウ戦争、南・東・中央アフリカにおける黒人メシア運動

4 伝統的抵抗

事例1 ナンディの抵抗

- 東アフリカ ナンディ社会 イギリスが征服する上で最も手こずった牧畜民社会、伝統的社会構造
- 19C末イギリス人キャラバン 襲撃→ウガンダ鉄道建設を妨害
- スーダン人傭兵部隊の「懲罰作戦」の対象になり、集落を焼かれる

- ナンディ社会 ポロリエットとよばれる地域集団から形成
- 各ポロリエット 戦士階梯である年齢組の男子が共同生活
- オルコイヨット(伝統的指導者) ポロリエットを統率
- 最高の指揮官と戦闘力、機動性に富む常備軍
- 通常は牛の襲撃、掠奪に備える
- イギリス軍に対して遊撃戦と夜襲で互角に戦う

ナンディの事例から明らかなこと

- 伝統的社会構造 侵略に対して有効な抵抗
- ☞ 大規模な国家や偉大な王が有力な抵抗をおこなうとは限らない
- ヨーロッパ列強に打撃を与えたのは、王や国家をもたない無頭制の小社会
- 機動性、小規模なゲリラ戦に富む
- 交渉すべき相手がいない

伝統的抵抗

事例2 チムレンガ(ジンバブウェ)

- 植民地政府 政治化した呪術師、霊媒師の活動を警戒 政治権力の脅威
- 民衆に直結した信念・実践

1890年代の南部アフリカ 植民地支配の体制 制度化

- 小屋税徴収、強制労働
- 土地の収奪 リザーブシステム
- 南ローデシア

- 1889 チムレンガとよばれる武装抵抗開始
- ショナ人のマショナランド、ンデベレ人のマタベレランドへ拡大
- マタベレランド 最初の1週間で130人の白人殺害
- 南アフリカ会社 マタベレランド救援隊を派遣、アフリカ人 ゲリラ戦

スビキロ 伝統的予言者 チムレンガの中心的役割

- 税、強制労働、牛疫、旱魃などは全て白人による災い
- 白人を追い出すという神託の実現

- スビキロたち マショナランドのカクビとネハンダ、マタベレランドのムワティなど 連絡を取り合い抵抗
- ショナ人 中央集権化した政治・軍事機構なし スビキロの神託にそって果敢に戦う
- セシル・ローズ(南ア会社)
- 懐柔策 インデベレ人の首長に入植用の土地を贈与
- それが成功するとイギリス軍 マショナランドへ全軍を差し向ける
- 1897 チムレンガ ショナ人スビキロ2名の死刑で沈静化→1903 制圧

伝統的抵抗

事例3 マジマジ(タンザニア)

- 1905・7 マジマジの反乱 タンザニア南部の民衆反乱→1907・6 鎮圧
- アフリカ人の犠牲者 10万～25万人、白人の犠牲者5人
- 反乱の原因
- マトゥンビ人の霊媒師キンジキティレ ドイツ人に対する反乱をよびかけ「死んだ祖先が蘇って味方をしてくれる。薬用の水(マジ)を飲めば銃弾にあたっても死ぬことはない」と告げる
- 1905・8にキンジキティレが絞首刑になっても継続
- タンザニア全土3分の1にまで拡大
- 20以上の民族が結集

4 キリスト教と抵抗運動

- キリスト教 植民地支配の浸透に最も貢献
- 白人教会と一線を画す黒人教会の誕生
- 旧約聖書を引用しながら一夫多妻制などを公認し、民衆の強化を獲得
- 植民地化 人種的不平等や抑圧的体制に対する反抗運動へ

黒人教会2つのタイプ

①エチオピア型

- 布教のための整然とした組織と教育部門に特徴
- 司祭 伝統的な指導者

②シオニスト型

- 不安定で分離志向
- 多くの組織、激しい運動
- 性格は予言的、反抗性強い

シオニスト型抵抗運動 事例

キンバング運動

創始者

- 1889 ベルギー領コンゴ中部のンカンバ村で誕生
- 当初はバプテスト教会で学ぶ
- 1921・3・18 教会を開設
- 自らを予言者、神の使徒、神の子であるとして、グンザ(三位一体を表す)、「黒いメシア」と称する
- 1921・9・14逮捕→1951獄死
- 死後も彼の教会は影響力を持ち続ける

キンバング主義の教義

- キリスト教の教義の借用 伝統の革新、生活の自律的近代化、偶像の破壊、妖術師の駆逐
- バコンゴの土着的信仰に根差す
- 選民思想 植民地当局およびカソリック教会がとったバコンゴ文化に対する不寛容な態度へのアンチテーゼ
👉 バコンゴ主義という「部族主義」の枠に運動を限定してしまうマイナス面でもある
- ベルギー植民地政府
- 「黒人は黒人のキリストの導きによってのみ救われる」、
- 「コンゴをコンゴ人の手に」といったスローガンは大衆をひきつける

- 当時のベルギー領コンゴ アフリカ人の生活はより困窮
- 1917～24
- 綿花栽培の強制労働に動員される農民も激増
- 鉱山労働者確保のため国は徴用を民間のブローカーに委託→悪質な雇用請負人が村をあらす
- 「綿花栽培をするな、税金を納めるな」と説くキンバング教会

- キンバング逮捕後も政府の弾圧は続く
- 運動は地下に潜って継続→多くの独立教会が誕生
- 1923・12～1924・5

☞ 主に仏領コンゴ隣接地域に限定されていた運動がベルギー領コンゴ全地域でゲンザ(全ての者という意味)の称賛

- 1930～40代 シオン・ムパディの教会 ネオ・キンバンキズム (カーキ教) ザイール川下流の低地コンゴで高まる
- 本体のキンバング教会 キンバングの末子ディアンジアンダの指導で独立後、コンゴ最大の教会になる
- 1931 生活苦が深刻化するなかで宗教活動再熱→ 植民地当局 徹底的な弾圧開始⇒

5 イスラーム神権国家

- イスラーム神権国家と抵抗運動
 - ①ヨーロッパ植民地軍と戦わず、降伏
 - ソコト帝国、フルベ・イスラーム国家、トゥクロール帝国
 - 植民地侵略軍と比べると軍事力の差が大
-
- ②ヨーロッパ軍との激しい交戦
 - サモリ、マフディー、ラバーなど

事例 スーダンのマフディー国家

- 1881 スーダン マフディー運動始まる
当時のスーダン エジプトのムハンマド・アリー朝の属領
- ムハンマド・アリー朝 オスマン・トルコ、ヨーロッパ列強の潜在的支配下に→1882 オラービー革命 イギリス軍の介入→エジプトは英の植民地に
- ムハンマド・アフマド・イブン・アブダッラーがマフディー（救世主）として立ち上がり、聖戦を開始
- スーダンのイスラーム 伝統的にはカーディア派のスーフィーズム教団
- ムハンマド・アフマドはサンマーニヤに属する（18C後半に様々な教団の統合をめざして形成された新興教団）

- マフディー軍 急速に勢力を拡大、イギリス軍の本格的な攻撃に備えて備蓄
- 1885 イギリス軍のチャールズ・ゴードンが死亡、マフディー軍勝利
- 1885 マフディー死去
- イギリス 1896 キッチナー将軍指揮によるスーダン侵攻本格化
- 1899・12

6 植民地ナショナリズムの萌芽 ヘレロの反乱

- 宗教的形態をとらず、2つの民族(ヘレロとナマ)が共通の敵と戦う
- 1904ドイツ領南西アフリカ(現在のナミビア)で開始
- 反乱の原因
- ①ドイツの土地収奪
- ドイツ帝国 銅、金、ダイヤモンドなどの地下資源の確保を目的として、1890年代からナミビア人の土地を「購入」(ほぼタダ同然)
- 資源運搬用の鉄道を建設するため強制的な土地収用
- →各地で暴動発生 植民地主義者による鎮圧

②ドイツ人入植者による家畜の略奪

- ③アフリカ人の法的権利 極度に剥奪
- ドイツ支配下のアフリカ人
- ドイツ人 アフリカ人をどのように取り扱っても実質的に処罰されることはない
- 裁判におけるアフリカ人の証言 単なる形式に過ぎず
- ドイツ植民地支配当局 軍事支配を強化(植民地保護軍 1894年803人→1903年 3701人)

- 1904・1・12・ ヘレロのパラマウント・チーフ、サミュエル・マハレロの命令でドイツ人入植者を襲撃 土地と家畜を獲得 その後しばらくヘレロが優位に
- 1904・6・11 トロッサ将軍 最高司令官として着任→戦局変わる→
- ドイツ 軍事力では圧倒
- 10・2 トロッサ 老若男女かまわず殺戮開始、オマヘケにのがれていた約8万人のヘレロも飢餓生活
- ドイツ軍の追撃を逃れて食糧事情がよい英領ベチュアナランド、ヘレロランド、オヴァンボランドへのがれることができたヘレロはわずか数千人。

- ナミビア南部 1904・8・30 ナマの反乱開始
- 指導者 ジャコブ・モレンガ 南アで鉱山労働者として働いた経歴あり
- モレンガの部隊: 数は400人を上回り、
- ヘレロとナマ: 従来は競合的關係→1870 両者「和平」を結び友好的に 統一行動とすることが可能に
- 1904・10 当初ドイツ側にいたナマの有力者、ヘンドリック・ウィトブーイ モレンガ側に立つ
- 1905・1・5 ドイツ軍司令官 外務省に全面敗北を認める報告書を提出

- 1905・10・29 ヘンドリック戦死 ナマの戦意喪失→動揺した数人の指導者(ヘンドリックの部下)がドイツ軍に降伏
- 1906・2～3 ドイツ軍 モレンガの部隊に対して約5000人の兵力を投入して大規模な攻撃開始
- モレンガ 撤退→5・1 英領ケープ植民地へ避難→イギリスに1年間勾留される→ケープ植民地から逃亡
- イギリス ドイツ軍とともにモレンガ鎮圧にまわる→9・20 イギリス軍とモレンガ軍戦闘→モレンガ戦死→中隊長コッパ率いる部隊は1907・3までドイツ軍と戦う

- ドイツ軍 鎮圧のために莫大な資金を喪失、1447人の戦死者
- アフリカ側 ヘレロは人口の約80%、ナマは約50%が減少(戦死者、飢餓者、難民含む)
- ドイツ 土地収奪完了
- 1912 ナミビア総面積83万5000平方kmのうち、アフリカ人の所有部分は1万2373平方km
- 土地収奪によりアフリカ人の経済生活 根本的に変更

7 初期抵抗運動をどう捉えるか

ヨーロッパ列強によるアフリカ征服の「正当化」

* パーハム(イギリス・アフリカ史家): 植民地支配により
アフリカは無政府状態と相互殺戮を救済された

- 鉄道、道路、食糧、電気、都市生活、民主主義などの恩恵
- アフリカ人は植民地支配を歓迎

アフリカ人支配者層の選択肢 限定

パーハムらの歴史観 ↔ 独立後のアフリカ民族主義史観

- ヨーロッパの協力者 = 進歩派 ↔ 裏切者、日和見主義
- ヨーロッパと交戦 = 頑迷派 ↔ 抵抗の英雄

👉 このような2分法はあまりに単純

おもな参考文献

- 宮本・松田編『新書 アフリカ史』講談社現代新書
- 岡倉登志『アフリカの歴史 侵略と抵抗の軌跡』明石書店